

働きすぎ黒書 ニュース

全日本教職員組合（全教）生権局

2006年7月11日

東京都千代田区二番町 12-1 3F

【北海道発 夫婦物語】

私は高校の小規模校（6学級）で3年の担任兼学年主任でした。学校の存続をかけたの「特色ある学校づくり」で持ち時間数が、週19時間、時には22時間のこともありました。厳しい生徒指導も要求され、生徒の不満に対応しながらの業務でした。その頃の妻とのやりとりを紹介します。

（教員の妻）「学校の先生って早く帰ってくるんでしょっ！うらやましい！」こういう挨拶って意外と多いのよ。けど、「とんでもない、夜11時に帰ってくればいいほうで、お昼ごはんもままならず。」「えっ！ いったい生徒のいない時間は、なんの仕事しているの？あなたの旦那さんだけ仕事がトロイ（遅い）んじゃないの？」確かにそれも一理...。「けどね、学校っていうところは、とにかく書類仕事がたくさんあるようで...。家庭訪問に行くだけでも書類の提出が必要だし、休日に家族でどこかに泊まりがけで出かけるのでさえ、書類を離さない。これじゃ泣けてくるでしょっ」と話してるの。

（教員）そうだね。なかなかわかってもらえないけど、推薦入試の志望者が多いから「推薦書」をいくつも作成してるんだよ。しかもその書類に進路部長、教頭、校長から叱咤・罵倒のあめあられのあげく、何度となく差し戻しとなり決裁がなかなか出ないんだ。少ない空き時間をフルに使い、また、放課後の生徒の面接練習の後で必死で“作文”をしては、つき返される。そんなこともあって帰宅が11時すぎになることも多かったんだ。あの頃は昼食をとれば嘔吐感が出るし、帰宅後も食欲が出ないため、ろくな食事摂れず、一気に10kgやせたんだ。

（教員の妻）「仕事やめてもいいか？」と...突然の申し出にそこまで辛かったんだと思ったわよ。けど、今のクラスの生徒を卒業させたいという気持ちも知っていたので、「仕事を辞めたいなら離婚する覚悟で決断したら？」と私なりにハッパをかけたつもり...だったの。その後、卒業式も間近に迫った頃、「校長宛に『お前のせいだ！』と遺書を残して学校で首吊り自殺しようと考えて」と聞いたとき、妻として対応が間違ってたんだな...と思ったの。それから少し経ったころ、午前0時を過ぎても帰宅してこない...、一体どうしたんだろう...。毎日学校へ行くのがつらそうだったし...もしや...どこかで...とよからぬことを心配していたら、午前1時半やっと帰宅。そしてすぐ寝てしまった。一安心したものの、朝5時には起きてパソコンに向かってまた提出書類の作成をしてる姿に涙がでそうだったわ。

何度も校長宅に直談判しにいこうと考えたのよ。本当に自殺なんて事になったら、もちろん、私の命を削ってでも裁判ですけどね。

(教員) 夏休みは土日にも講習があったけど、管理職に代休を申請しても「日程的にムリです！」と返答されたんだ。

(教員の妻) それって酷い...

~そして2人のやりとりは続きます~

「どうしてあなただけそんなに忙しいの?」「どうしてだろ?」「他の先生にも手伝ってもらったら?」「そうもいかない」「えー。それにどうして、相手の間違っただけにも反論しないの!?!」「説明が大変だから...」「どうして大変なの?」「他人の話を聞かない人だから」「言わなきゃわからないこともあるんじゃないの?」「そんな元気も時間もない」

(教員の妻は...) 私一人が鼻息を荒くして、こんなエンドレスなやりとりを2年近くしてきました。こういう職場があることを知ってほしいと切に願います。

お願い

手記集「教職員“働き過ぎ”黒書」のとりくみ要請について

労働条件が切り下げられようとするもとで、職場の現実を告発し、社会的にもアピールするための手記集作成にとりくんでいます。各組織1以上お願いしたところですが、まだのところは引き続きのとりくみをよろしくお願いします。

* 教職員の家族(父母・子ども)からの声もよせていただければ...と考えております。

内容：家族からみた教職員の“働き過ぎ”の実態あるいは本人の告発
字数：600字～800字を目安に
締めきり：7月中

原稿送り先

〒102 - 0084 東京都千代田区二番町12 - 1 全国教育文化会館3F
FAX 03(5211)0124
Eメール c_uenishi@zenkyo.org

問い合わせ TEL 03(5211)0123 植西